

## 二国間交流事業 共同研究報告書

令和6年4月15日

独立行政法人日本学術振興会理事長 殿

[日本側代表者所属機関・部局]

立命館大学・総合心理学部

[職・氏名]

教授・岩壁 茂

[課題番号]

JPJSBP 120228401

1. 事業名 相手国: イスラエル (振興会対応機関: ISF)との共同研究

2. 研究課題名

(和文) 心理療法における変容メカニズムとしての情報の役割

(英文) The role of affect as an active mechanisms of change in psychotherapy

3. 共同研究実施期間 2022年4月4日 ~ 2024年3月31日 (2年0ヶ月)【延長前】 年 月 日 ~ 年 月 日 (年 ヶ月)

4. 相手国側代表者(所属機関名・職名・氏名【全て英文】)

University of Haifa・Professor・Sigal Zilcha-Mano

5. 委託費総額(返還額を除く)

本事業により執行した委託費総額		4,003,000 円
内訳	1年度目執行経費	2,033,000 円
	2年度目執行経費	1,970,000 円
	3年度目執行経費	- 円

6. 共同研究実施期間を通じた参加者数(代表者を含む)

日本側参加者等	6名
相手国側参加者等	5名

\* 参加者リスト(様式 B1(1))に表示される合計数を転記してください(途中で不参加となった方も含め、全ての期間で参加した通算の参加者数となります)。

7. 派遣・受入実績

	派遣		受入
	相手国	第三国	
1年度目	2	0	(0)
2年度目	0	3	1(0)
3年度目			( )

\* 派遣・受入実績(様式 B1(3))に表示される合計数を転記してください。

派遣: 委託費を使用した日本側参加者等の相手国及び相手国以外への渡航実績(延べ人数)。

受入: 相手国側参加者等の来日実績(延べ人数)。カッコ内は委託費で滞在費等を負担した内数。

## 8. 研究交流の概要・成果等

### (1)研究交流概要(全期間を通じた研究交流の目的・実施状況)

本研究の目的は、心理療法におけるクライアントの心理的変容における感情の役割について明らかにすることである。本研究では、日本とイスラエルの研究者が実施している大規模な効果研究のデータを組み合わせ、心理療法プロセスにおける感情の治療的機能について検討する。それぞれの研究者が実施している効果研究のデータを組み合わせ、さらに共同研究プロジェクトを立ち上げることを目的とした。さらに、2 国の共同研究を、感情を中心として変容メカニズムを検討する国際共同研究ネットワークの基盤とすることを目指した。

研究はコロナ禍にはじまり、イスラエルでのテロにより派遣や交流が難しかったが、The Society for Psychotherapy Research の国際大会開催時やオンラインの会議などによって共同研究を続けた。その結果、学会での論文・ポスター発表、東京での講演会、相手国への渡航と研究会、などが実現した。現在、相手国では1名の博士論文研究が本研究交流によって実現した。2024年6月に開催されるThe Society for Psychotherapy Researchの国際大会では、本共同研究の成果を発表する予定である。

### (2)学術的価値(本研究交流により得られた新たな知見や概念の展開等、学術的成果)

本研究では、それぞれの心理療法効果研究のデータを組み合わせて、より大規模な心理療法のメカニズムとプロセスの検討を目的とした。新たな知見や概念の展開としては、心理療法の変容メカニズムとしての「傷ついた癒やし手」の検討である。効果研究のメタ分析は、一貫して介入・アプローチによる効果よりも、セラピスト個人とかわるセラピスト要因がより大きく寄与していることを示してきた。「傷ついた癒やし手」はセラピスト自身が受けた心理的傷つきとそれをどのように扱ったかということが、心理療法の介入に影響することを捉えた概念であり、人と人の接触を通して心理的問題を解決する心理療法の効果に大きく関係していると考えられる。セラピストに対するインタビューだけでなく、そのセラピストが実施した心理療法のデータも入手可能であり、これまでにない、効果研究の形を提示することになる。

### (3)相手国との交流(両国の研究者が協力して学術交流することによって得られた成果)

イスラエルの共同研究者 Sigal Zilcha-Mano 氏は、世界トップレベルの効果研究を行っている。2024年3月に東京の立命館大学キャンパスで開催した講演会には、70名近くの心理士、大学院生、大学教員が参加したが、最新の研究法や知見について紹介していただいた。日本において心理療法の実践に関する研修会や講演会は多く開催されているが、心理療法の実証研究に関する講演会が開催されたことは例をみない。これまで、イスラエルの研究者は、「傷ついた癒やし手」の基盤となるような研究を実施しており、本研究への概念的な貢献が大きい。それぞれの国において、インタビュー研究を実施しており、かなりデータが蓄積されてきた。今後は蓄積してきたインタビューデータと効果研究のデータを組み合わせる研究を計画している。

### (4)社会的貢献(社会の基盤となる文化の継承と発展、社会生活の質の改善、現代的諸問題の克服と解決に資する等の社会的貢献はどのようにあったか)

現代社会において心理的傷つきやトラウマについて話題になることが多い。WHO が発表した報告書によると世界の人口の内、約3億2千万人がうつを患い苦しんでいる。この数字は世界の人口の約5%にも上る。本研究は、うつに対する心理療法効果研究のデータを中心に扱っている。加えて、心理療法において介入を行うセラ

ピスト自身が受けた心理的傷つきがクライアント理解にどのように結びつくのかということを検討している。つまり、心理的傷つきが単にネガティブな意味をもつのではなく、心理的成長や健康を深める役割をもつことを示すことを目的としている。これらの実証的研究は、今後、うつの効果的な治療・介入についての包括的な知見となることが期待される。

(5)若手研究者養成への貢献(若手研究者養成への取組、成果)

本研究には、若手研究者がデータ分析やデータ収集に関わった。学部生、修士課程、博士課程の学生がかかわり、本研究のデータの一部を国際大会において発表した。さらに、現在、相手国の博士課程の学生は本研究の一部を博士論文研究へとつなげ、研究主導者の修士課程の学生も本研究のデータの一部を修士論文研究として発展させる予定である。本研究にかかわった学生は質的データ分析の手法を学ぶことが出来た。また、大会における発表を通して外国の研究者とも交流する機会をもつことが出来た。彼らは、2024 年度も国際大会での発表が決まっており、国際的な活躍も着実に視野に入れつつある。

(6)将来発展可能性(本事業を実施したことにより、今後どのような発展の可能性が認められるか)

本研究を発展させる研究プロジェクトを、2024 年度立命館大学国際共同研究促進プログラム(共同研究型)に申請し、採択された。この補助金により、これまで続けてきた共同研究を継続し、さらに拡張していく。The Society for Psychotherapy Research の会員に働きかけ、感情を変容メカニズムとする世界規模の共同研究の基盤作りを進める。そして、科研費「国際先導研究」または「国際共同研究強化」「海外連携研究」に応募したい。日本における心理療法の実証的研究の発展、さらには世界規模の心理療法研究を先導することを目指す。

(7)その他(上記(2)~(6)以外に得られた成果があれば記載してください)

例:大学間協定の締結、他事業への展開、受賞など

2024 年度立命館大学国際共同研究促進プログラム(共同研究型)に向けて立命館大学と University of Haifa で大学間の研究協力協定を締結する予定である。また、この2大学の研究協力を発展させていく。